
アンチ・ヒーローズ

南川キセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンチ・ヒーローズ

【Nコード】

N9752H

【作者名】

南川キセル

【あらすじ】

あのヒーローズとは何の関係もありません。ただ、影響は受けます。日本人の超能力者に日本は救えるか？

萌芽 1

交番に戻ってきた札川は目の前に、制服を着た女の子がボーッと立っている姿を見つけた。

何をしてるんだろう。

声を掛けようか、札川は逡巡した。それは少女があまりにも可愛かったせいだ。可憐な容姿はアイドル歌手を思わせ、若い札川の胸をときめかせるには充分だった。しかし、彼は警察官だ。自分の職務に忠実であらねば。その結果、メアドなり携帯の番号を知ったとしても、それは職務の結果ということだ。「どうかしました？」

「え？」

少女は札川の存在に初めて気付いたようだった。少女の澄み切った瞳に見つめられて、札川は頬が上気してくる自分を感じた。

「何か困ったこと？お巡りさんで力になれるかな？」

「ううん」

首を傾げて悩んでいる姿も愛らしかった。

「人が死ぬの」

「へっ？」

札川は少女に見とれて聞き逃してしまった。

「今、なんて」

「分かっているの。警察に話したところで、何にもならないことぐらい」

少女は自分の無力さを恥じているようだった。

「人が死ぬの。ううん、殺されるの」

この美しい少女は何を言っているのだろうか。札川は一瞬見失って、反射的に問い返した。

「誰が？」

「官房長官」

「カンボーチョーカン」 少女の口から出た言葉は余りにも似つか

わしくなくて、札川の頭で漢字でイメージするまでに、多少の時間がかかった。

「か、官房長官ね」

札川は少女の横顔を見つめた。そして、その似つかわしくない言葉の中に、狂気の兆しがあるのか、見極めようとした。

「死ぬわ。その人」

札川は彼女が普通でないと、判断した。

「官房長官って何する人？」

「さあ」

「警察官のくせに、知らないの？」

考えてみると、札川には分からない。元々が政治に疎い方だ。

「でも、もう無駄だったよね。彼は殺されたわ」

「わかったよ。ちょっと待っててもらえる？」 札川は彼女の搜索願が出されているに違いないと考えて、交番に取って返した。

「今戻りました」

交番の奥はひっそりとしている。先輩がいるはずなのだが。奥からテレビの音が聞こえて来た。

「すいません。施設辺りからの搜索願って・・・」

先輩はテレビに目を据えたまま札川の方に、視線を向けずに言った。

「テロだ」

「は？」

「日本にもテロだ。いやな世の中だな」

「何があつたんですか？」

「官房長官が殺された。テロだ。声明文は新聞社に送られて・・・」

札川は先輩の言葉を、最後まで聞かずに、交番から飛び出した。

あの少女は知っていた。どうして？

慌て交番を飛び出した札川は、既に消えてしまった少女の残り香を嗅いだような気がした。彼女はこの世のものであったのだろうか

？ 札川には自信を持って言い切ることが出来なかった。

萌芽 2

「まあ、薬を飲んで様子を見ましょう」

次木清貴はほっとして、午前最後の診療を終えた。

「へば医者にしては、患者が多い日だったな」

「先生つたら」

ナース姿の横田藍は大仰に笑って見せた。

やっぱり力を落としている。

藍はそう思う。彼は根っからの医者だ。それも、すごぶる腕のいい。藍はもう次木とは6年来の知り合いだ。その間、日に日に白髪を増やし、肩を斜めにしていく、医師の姿を、胸を痛めながら眺めていた。

「ご飯買って来ましょうか」

「頼むよ」

「いつもので、いいですか？」

「ああ、のり弁当で頼むよ」

藍はこの30年以上の離れた老医師に恋心を抱いているのか、自分でも、判断できなかった。しかし、お互いに最早、離れる訳には行かない事情もあった。

その時、診療室の片隅に唐突に男が現れた。何もなかった場所から忽然と、湧き出して来たような男は、全身に擦過傷を貼り付け、足を引き摺ってよろよろと次木に歩み寄った。

「やぶ医者！」

男は不敵に笑いながら、次木の前で尊大に胸を張った。

「よう、やぶ医者、久しぶりだな」

次木は男を見てこれ以上ないくらいの嫌な顔をした。

「うんざりだな。何しに来た」

「ちよっと怪我をしたんでね。やぶ医者でもこれくらいなら直せる

だろうと思っ てな」

肩を大きく上下させた男は随分体が、痛めつけられている。次木は、更に嫌な顔を加速させて言った。

「しょうがないなあ。藍君、君は弁当を買ってきて」

藍は体をブルブル震わせて、さっきから自分を無視している男を睨みつけた。

「満、あんたは本当のバカね」

満は藍の方を一瞥すらしなかった。

「そうさ、俺はバカだ。こんな所に、のこのこ来ちまったんだから」
満は次木を睨みつけながら、血を吐くと、その場に崩れ落ちた。

萌芽3

棚橋宏武はぼんやりとテレビに目をやっていた。

特に何を見てるといふ訳ではなく、ただ、網膜の運動としての視聴、それ以外には、言いようがなかった。他の刑事たちは既に出払っている。

今朝、政府の要人がテロリストに殺されるという、日本警察が一度も想定したことがない大事件が持ち上がった。しかし、状況は全く棚橋の耳には入ってこない。特別厳しい箝口令が引かれていることは、まず間違いない。

棚橋はデスクに肘を置いて、よれよれになった、シケモクに火を点けようとした。

「煙草はやめろ」

直属の上司である警部補が言った。

「煙草の前に署長室に行け」

「こないだの始末書は出したぞ」

「そんなことじゃない。とにかく黙って、俺の言う通りにしてろ」

棚橋を目の敵にしている警部補は忌々しげに、口の端を歪めた。

棚橋はこれ見よがしに、のろのろ動いて、警部補の怒りに火を点けた。「早く行け！そんなことだから、非常時にも役立たずなんだ」
「へいへい」

やはり今朝から、刑事が出払っているのはテロへの緊急配備なのだろう。こんな時に別の事件があったらどうする気なんだ。棚橋はそれと同時に、署長の用事について考えてみた。が、思い当たることは全くない。ま、官僚主義バリバリの署長の話など、適当に聞き流しておけばいい。

棚橋はソックもせず、無造作に部屋へ一步入った。そしてそこには・・・棚橋が一番会いたくない奴が、署長室の机の上に腰をかけていた。

三浦勝巳はすらつとした足を組み替え、ニヤニヤ笑いながら、棚橋を眺めていた。高級品をそつなく身に着けて、またそれが様になる嫌な野郎だ。

「よ、元気だったか。貧乏刑事。しかしなあ、署長室に入る時くらいノックしろよ」

棚橋は拳銃を携帯していないことを、幸運に感じた。持っていたらこいつの頭を吹っ飛ばしていたところだ。

しかし、三浦は棚橋の忌々しい表情など、意に介さず

「おまえは今日から俺の部下だ」と言った。

棚橋の元上司はニヤニヤ笑いを、顔に乗せたまま言った。そして、三浦は棚橋にとって最悪な一言を付け加えた。

「黄金コンビの復活だ」

長く続いている廊下は死への旅立ちに相応しいのか、北川洋子には分からなかった。新設された死刑囚特別房から刑場へ至る道のりは、死刑囚にとっては長いのか、短いのか。

「ここで、小便を漏らす死刑囚もいるんですよ。あ、これはこれは若いお嬢さんには相応しくない話題でした。失敬失敬」

この人は死をどのていどの真剣さで考えているのだろうか。あまりにも呑気に、そして、あからさまに洋子の気を引こうとしている所長に不信感を感じてしまう。

そもそも私はなぜ死刑囚に会わなくてはならないのだろうか。

洋子はニュース番組でキャスターをやっている。華やかな容姿はテレビに出るようになって、更に磨かれ、人気は鰻のぼりだ。インターネットのサイトでは、洋子に関して毎日のように猥褻な話題が飛び交っている。そんな彼女が、取材でもなく、死刑囚の元を訪れたことには理由があった。

単純ではない力が働いている。洋子は、上司に警察への協力であり、聞き込んだ全ては警察に報告することになっていることを聞かされていた。そのことについて、報道番組のキャスターでもある洋子は一抹の疑問を感じないわけではない。報道人の使命として、警察につかんだ情報の全てを渡してしまってもいいものか。局側としては、警察上層部との円滑な情報交換を望んでいるのである。貸しを1つ警察に作るだけでも、効果的なのだ。そういった事情があったとして、その不快感に耐えうるとしても、1つだけ、答えの出ない疑問が残る。

「なぜ、私なのだろう」

死刑制度に関してはつきりとした発言をした覚えもなければ、これから会う死刑囚の事件に言及したこともない。しかし、死刑囚の方から洋子にのみ、面会して重要な事柄を告白するという指名を受

けたのだ。そして、今死刑囚特別房への渡り廊下を歩いている。洋子はその状況に怖気を振るっていた。

長いとも、短いとも結論のでなかった渡り廊下を通り抜けて、独房の前に立つと、洋子は異様な汗が背中を滑り落ちた。所長の声は遠くに聞こえた。

「こちらです。もし、何かありましたら、こちらに看守を立たせておきます。遠慮なく仰って下さい」 所長が立ち去ると洋子は一人になった。この扉の向こうには死刑囚がいる。洋子は口の中に、渴きを覚えたが、無理矢理勇気を振り絞って、その扉を開いた。

洋子が入った部屋は少し小さな会議室といった感じだった。新設された施設らしく、隅々まで埃なく清掃されているが、そこに死という絶対的なものの入る余地があるのだろうか、洋子は震える足を踏ん張らせて考えた。

そして、机を隔てた目の前に座っている男に目を止めた。死刑囚137号。姓名を平田勇吉。57歳。18年前に連続殺人で7人を強姦の上に殺害。10年前に死刑判決を受け確定。以後未だ死刑執行は停止されたまま。

洋子は予備知識として渡された資料を最後まで熟読出来なかった。凄惨な現場の写真も封入されていたからだ。しかし、その資料にある犯人像とはかけ離れた老人が、パイプ椅子にちんまり座っていた。こんなところで座っていないければ、公園で穏やかな笑みを浮かべ、日向ぼっこでもしていそう、そんな老人だった。一瞬洋子は部屋を間違えたのかと思った。その時、穏やかな声で平田は洋子に話しかけた。

「どうも、ようこそいらつしゃいました。こんな場所で、こんな挨拶は無理がありますよね」

と言つて静かに笑った。

「どうぞおかけ下さい」

洋子は慌て椅子を引いた。不気味な音が部屋に小さく響く。洋子が面と向かつて、平田を見ると、洋子を感じていた違和感の原因が分かった。平田は拘束服で椅子に縛り付けられていた。

「あまり時間がないので単刀直入に聞かせて頂きたいんですが、どうして私なんでしょうか？」

平田は洋子を見つめると更に消え入りそうな声で言った。

「あなたに重要な情報をお渡しするのは贖罪の気持ちからなんです」
洋子は意味が分からず平田の次の言葉を待ち受けた。

「実は私、あなたの両親を殺しているんです」

萌芽 5

官房長官が暗殺されたと言つ一報が首相官邸にもたらされた後、情報は錯綜し、新聞社に届けられた犯行声明が明らかになることによつて、その恐慌は内閣を席卷した。すぐさま、内閣総理大臣を頂点としたテロ対策本部が準備された。実行指示の全権は警視總監に一任された。

「検死報告は上がってきたのか？」

「はい、それが・・・」

「早く言え、時間を無駄にするな。テロとの戦いは一刻の猶予もないのだ」

「しかし、報告のしようがないのです。つまりテロ行為という以前に医学の枠を越えてしまっているのです」

「訳の分からんことを言うな」

警視總監は苛々と彼の話を聞いていた。どこへも行き着かない話を聞かされるのは、うんざりの一語に尽きた。

「端的に言つて、なくなっていたんです」

とうとう警視總監の堪忍袋の緒が切れた。

「いい加減にしろ。報告は分かり易く簡潔にだ。貴様の話はさっぱり分からん」「分かりました。ただ、私の正気を疑わないでください」

彼はテロ対策本部長に任命された、元々が官僚のホープであった。しかし、彼の額の汗は残念ながら、現状の認識に欠けた証左と見做されてしまっている。警視總監は彼の次の言葉を待った。

「なくなっていた。いや消えていたんです」

「だから何が消えていたんだ」

本部長はゴクリと唾を飲んだ。

「内臓です。内臓全てがなかったんです」「内蔵が？そんなバカな

話があるか！」

「だから、言ったじゃないですか。私にだって理解不能何ですから」
「そんなことが・・・」

「それから、こちらが新聞社に送られてきた。犯行声明です。しかし、これは」

対策本部長は緊張の面持ちのまま、ビニールで嚴重に覆われた一枚の紙切れを警視總監に渡して言った。

「実は、次の犯行予告でもあるんです。その部分は報道されてません」

警視總監は注意深く文面を読んだが、そこには稚拙な筆跡でこう書かれていた。

『これは終わりじゃないよ、始まりだよ、もともとずっと死ぬんだよ。まずは官房長官の内臓をいただいたよ。次は誰にしようかな』

警視總監は青い顔になって、本部長に言った。

「三浦を呼べ」

「三浦を・・・ですか」

「こういうことは専門家に任せた方がいい」

警視總監は三浦の端正な横顔を思い出して、苦虫を噛み潰したような顔になった。また、あいつにいいように振り回される。そう思うと胃壁がきりきりと痛んでくるような気がした。

鳴動1

「私の両親を殺したと・・・」

洋子は激しく動揺した。自分の両親はまだ、生きている。今日も同居している母にお早うを言ってから家を出た。

「それは、どういうこと・・・」

「まずいこと言っちゃったな。今の両親から聞いてないのか」

平田は悪びれもせずと言って、笑った。洋子は震える唇を抑えきれなかった。

「俺はあんたの家に押し入ったのは20年前だったな。あんたのことも覚えてるよ。あんたは小さかったな」

平田はがらつと表情を変え、残忍で淫猥に笑った。

「あんたの母さんは、柔らかかったな、プシューってナイフが突き刺さって血がプーって」

平田は急に幼児のような胡乱な顔になって、涎を垂らした。

洋子は悲鳴を上げた。しかし、強ばった喉からは、何の声も上がらなかった。

「思い出すよ。あんたも俺のこと覚えてないかい」

平田は拘束服を着たまま、腰を動かしている。興奮して、顔が上気していた。「ああ、あああ」

平田は射精していた。その時、漸く洋子の喉から、つんざくような悲鳴が滑り出た。

「キヤー！」

外にいた二人の刑務官は部屋に飛び込んでくると、平田の体を押さえつけた。

「大丈夫ですか」

「ええ」

洋子のか細い声で刑務官に答えた。

「ああ、ありがとう。気持ち良かった」

平田は引つ立てられて行きしな、洋子にそう言った。そして、
「あんたには妹がいる。そいつを探しだしな。そいつが鍵だ」
と捨て台詞を吐き、ニヤツと笑うと部屋から連れ去られた。
後に残された洋子は体中から血の気が引いて、震えたままその場
に立ち尽くしていた。まるで、レイプされたようだ、洋子はそう思
った。

鳴動2

パチンコ屋はいつものように混んでいた。毎日のようにイベントを繰り返しながら、出血大サービスを謳っている。橋本哲也は、常にその言葉に騙されている。いや、厳密に言えば騙されている訳ではないのだが。

橋本は眉間に力を入れて、打ち出されるパチンコ玉を睨んだ。するとパチンコ玉は不規則な動きで吸い込まれるように、チェッカーに入った。

「こつから先は運なんだよな」

橋本の台は回転数が上がった。ほどなく液晶画面には777が揃った。

「今日は勝ちの日だな」

橋本はのんびりと煙草に火を点けた。定職を持たない橋本は日がなパチンコ屋で過ごす。ここ数年、殆どそんな生活だ。

店員の一人が橋本の台の不規則な出玉に気がついた。店員は一旦控え室に戻り、もう一人の店員を連れてくると、橋本の後ろに立った。

「お客様、少しよろしいでしょうか」

マズい。気付かなかった。橋本は舌打ちしたい気分だった。

「こちらの方へ、どうぞ」

言葉遣いは慇懃だったが、両側から挟むように脇に手を入れられて、無理矢理立たされた。暴力の予感に怯えた橋本は、しきりに、違うんです、違うんです、と繰り返したがとりつく島はなかった。

裏口から叩き出されると、唇の端が切れて、血の味がした。何度目かの苦い味だ。なぜ、俺の力はこのなにも弱いのだろう。これは超能力というのではないか。しかし、俺にはパチンコ玉を誘導する程度の力しかない。殴るあいづらを念力で投げ飛ばすことは出来ない

い。

自己嫌悪と共に歩き出すと、近くにあった電柱にもたれかかった。そして、ポケットからシケモクを出すと口にくわえた。

垂れ下がった雲から霧雨が頬に触った。

「ついてねえな」

と呟くと、橋本はうらぶれた気持ちになった。

すると、突然、通りがかった少女が橋本の目の前に立ち塞がった。少女は橋本を軽蔑したように見下ろすと、吐き捨てるように言った。

「情けない。あなたは自分の力をそんなことにしか使わないの」

凜とした瞳は橋本の身を竦ませた。少女はあまりにも美しく、気高かった。彼女の頬に細かい水滴が纏わりついている。

「あたたにはもっと、やらなきゃいけない事があるの」

橋本は初めて見た美しい少女に気圧されながらも聞き返した。

「あんたは俺の能力を知ってるのか？」

「ええ」

間髪入れずに答えた少女の横顔を見て、橋本は胸を言い知れぬ不安が埋め尽くすような、嫌な感じがした。

鳴動3―1

棚橋は通常の勤務を外され、三浦と行動を共にすることになった。最悪コンビの復活だ。

棚橋は今年36歳になるが、三浦はまだ30をいくらかも越えてないはずだ。頭のとっぺんから爪先まで、ブランドものでビシッと決めたスタイルは見事に様になっていて、嫌みの一語に尽きる。

棚橋は徹底的に三浦の犠牲になって、出世街道を踏み外した。勿論現場の刑事に出世など限られた範囲にしかない。棚橋などとうに諦めている。

しかし、三浦は違う。三浦は色々な意味では官僚らしくない官僚だった。出世に汲々とした、事なかれ主義とは一線を画している。その犠牲になったのは棚橋だったのだが。

三浦はハンドルを握っている。いけ好かない三浦の唯一と言っていい特技は運転がうまいということだ。それは異常と言っていい。

棚橋は思い出した。昔、まだコンビを組んでいた頃、うつらうつら居眠りをしながら、三浦の車で現場まで行ったことがあった。しかし、いつまでたっても、車が動き出さないで、業を煮やした棚橋が眠気を蹴って目蓋を開くと、既に現場に着いていた。つまり、発車、停車、カーブと、一切揺れることなく、棚橋には車が動いている感覚が伝わらなかったのだ。棚橋は魔法に掛けられたように茫然として、三浦のドライビングテクニクに感嘆させられた。

その運転技術はいささかも衰えていない。棚橋にはあえて、口に出していうつもりもなかった。

「おい、渡してやれ」

「ハイ」

棚橋は助手席に座っている女性から一枚の紙切れを受け取った。三浦の秘書であろうか。車で移動中も一切紹介はなかった。

「犯行声明だ」

棚橋はざっと目を通した。稚拙な文字は犯人の知能指数を現しているのか不気味だった。

「内臓がなかったのか」

「ああ」

なるほど、三浦が呼ばれる訳だ。

「こっちの彼女もチームの一員だ。よろしくやってくれ」

「内村和美です」

棚橋は彼女の滑らかな頬が、見えると下腹部がぞくぞくとした。「やつちゃっていいのか？」

和美はびくんと反応した。三浦はそんな彼女を見て笑い出した。

「手強いぜ。彼女は。まあ、何とか交渉してやってくれ。ただ、無理にやろうとしたら、痛い目に遭うだろうな」

三浦は愉快そうに棚橋と和美を見比べた。

そして、ほどなく車は物々しい大量の警察官がいる、アパートの前で、振動一つせず停まった。

「ここは？」

「その声明文を出した奴の居場所だ」

三浦は気障な仕草で煙草をくわえた。

「お偉いさんは、こいつを掴まえて”チャンチャン”だと思ってやる」

三浦は棚橋を見てニヤツと凄絶な笑みを浮かべた。

「これが始まりなのにな」

鳴動3―2

車を降りると、三人はあっという間に夥しい警官に囲まれた。彼らは揃って重装備である。

「まるで、軍隊を相手にしているようだな」

三浦は真剣さの欠片もなく呟いた。しかし、それだけお偉いさんには脅威なんだろう。何せ、内臓がそっくりなくなってしまったのだから。味も素っ気もなく。

「現場指揮官はどこだ？」

三浦はいかにも面倒臭そうに言った。その言葉を聞くと、三浦への反感が波紋のように警官隊全員に広がった。

「私ですが」

40を半ば過ぎたくらいであろうか、精悍な面構えをした男が言った。

「撤収させる」

現場指揮官は一瞬、キョトンとした表情になって、三浦を見た。

「どういうことですか」

「言葉の通り、撤収。てっ・しゅ・う」

指揮官は頭から湯気が上がりそうなほど、真っ赤になった。

「命令ですか？」

三浦は心底ウンザリして、棚橋を見た。面倒臭いことを棚橋に押しつけるつもりだったが、棚橋はそっぽを向いて知らん顔をしていた。

「どうもこうもない。聞いているだろう。俺が内閣情報室の三浦だ。俺が現場を仕切る。とにかく町中で軍隊ごっこはやめてくれ」

確かに現場は住宅街にあるワンルूमマンションの前だ。物々し過ぎる。

「何のために報道管制しているんだか、わかんねえよ」

「しかし、我々は凶悪なテロリストがいると聞いて、ここに・・・」

「とりあえず鑑識だけ置いて、戻れ」

三浦は戸惑う警官隊を尻目に何の警戒もせずワンルームマンションの入り口に大股で近付いていった。棚橋と和美はそのまま、三浦の後を追った。棚橋は三浦の背に思わず言った。

「おい、大丈夫なのか？」

「ん、ああ、凶悪犯のことか？そいつはやばいな」

和美は息を呑んだ。

「だがな、ここにいる奴は犯人ではない。利用されたただけだ」

そう言つと三浦はタフに笑った。

「そんな簡単に捕まる間抜けな奴が相手だったら、苦労しねえで澄むな」

三浦は、まだ警官が警戒している間を抜けて、無造作に扉を開いた。驚いている警官たちを置き去りにして中に入る。

「見ろ、死んでるだろ」

棚橋は部屋を覆う異様な臭気に鼻を塞いだ。和美は入った瞬間に、血の気を失って真っ青になった。

その部屋の主は、ロープ一本で宙にぶら下がっていた。しかし、その奇妙さは足元のバケツにある。和美はそのバケツを恐る恐る覗いた。そこにはいっばいまで満たされた血液に、あらゆる臓器が浮かんでいた。

和美は既に胃の中のもの全てを吐き出している。

「やってくれるな。棚橋、見ろ」

三浦は初めて厳しい顔をして棚橋に顎をしゃくった。壁には巨大な文字が血で書き殴られていた。

『くろつさま』

三浦は忌々しそうな顔を引っ込め、無理矢理歯を剥き出して笑った。

「挑戦状か、やってくれる」

血の臭いの充満する部屋で棚橋は自分がとんでもないことに巻き込まれていることを、初めて自覚した。

鳴動4

「しかし面倒なことになった」

次木は目の前に倒れ込んでいる平山満を見下ろして、言った。

「傷を直すのは簡単なんだが・・・」

「本当に馬鹿ですね。この人」

藍の瞳にはうつすら貼りついた憂いがあった。

「どうしましょう？」

「ほっておく訳にも行くまい」

次木は椅子から下りて、倒れている平山満の傍らで膝を屈めた。

そして、満の体に手を翳した。すると、見る見るうちに、傷口の癒着が始まった。次木の額からは滝のような汗が流れ落ちた。そうして、しばらく力を込めた後、ふっと力を抜いて、

「まあ、こんなもんだろう」

と言った。

次木は汗だくになって、椅子に戻ると肩で息をした。

「しかし、面倒なことになるだろうな」

「そうですね・・・」

藍は辛そうに満を見下ろしていた。満の体にあつた擦過傷はあらかた良くなっている。藍はいつもながら、次木の治癒能力に舌を巻いた。「とりあえず、隣の部屋へ運んで寝かしておいてくれ」

「はい」

藍はたっぷり数秒間、満を見つめて、おもむろに膝を折ると、小物でも拾うように、軽々と満の胴体を抱え上げた。華奢で小柄な看護師にこれほどの力があるのだろうか。次木は哀しそうな顔で藍を見た。

「頼んだよ」

藍は満を肩に抱えると、そのまま、診察室を出た。

その後ろ姿を見送ると次木は椅子に深く腰を下ろして、ふーっと

ため息を漏らした。そうして、沈黙したまま思考を巡らせた。満がなぜ、再び次木の前に現れたのか、何かが動き始めている。胸騒ぎを感じた。そして、携帯電話を取り出すと、

「しかたあるまい。どうせすぐにばれることだ」

と自分に言い聞かせるように言った。

コールは2回なる前に出た。

「もしもし、三浦か」

携帯から出てきた声は緊迫の度を増していた。次木はまたしても自分がやっかいごとに手を出しているという嫌な自覚が胸をどす黒く押しつぶしていた。

鳴動5

校門から出てくる女子中学生の波は下校時間には途絶える気配がない。彼女たちは口々に話の花を咲かせている。彼女たちの話題は多様にして一様だ。

しかし、ここ最近、彼女たちの話題はある一点に集中していた。

「ねえねえ、朋美も見たらしいわよ」

「ホントに」

「見たって、例の都市伝説？」

「そうそう。見たっていうか、何かキツネに化かされたっていう」

「狸なんじゃないの？」

「どっちでもいいよ。なんかさあ、よくあるじゃない。昔話で」

風が吹き始めた。突然の風は彼女たちの会話を吹き飛ばした。空は曇天に急変し、霧が立ちこめ、ほんの少し先も見えなくなった。

「ねえ、これってさあ」

「うん」

「朋美が・・・」

語尾が恐怖に震えていた。彼女たちは周りが暗闇に覆われ、立ち尽くしてしまった。そして、突然、自分たちの遙か前方に光が見えた。

「に、逃げよう」

「うん」

彼女たちは光に向かって全力疾走した。必死に走っても走っても光には近付かない。彼女たちは恐怖に泣きながら走った。

その時、

「やめなさい」

と言う凜とした声が辺りに響いた。

途端に辺りの景色が日常に埋没すると、女の子たちはその場に取り残された。

当たり前の風景。

その場で茫然としている男が一人。

女の子たちは我に返ると一目散に走り出した。後には男と、そして、美しい少女が残された。

「ねえ、そんなに女の子驚かして、何が面白いの」

少女は男に向かって言った。

「情けない」

男は応えたようにうなだれると、か細い声で少女に言った。

「どうして分かった。俺がやったとどうして分かった」

禍々しい波動が刃となって少女を襲った。頬に行く筋もの傷が走り、そこから血が流れ出した。少女は痛みを感じて、驚いた。

「痛覚にも働きかけることが出来るなんて」

嘆息と共に感嘆が少女の口から漏れた。しかし、少女の表情には動揺も狼狽も現れなかった。返って男の方に焦燥が色濃く出ている。

「もう、やめたら。あなたに人を傷つけることは出来ないでしょ」

男は肩で息をすると、疲れたような声で

「負けたよ」

と言った。すると、少女の顔に付いていた、傷は綺麗さっぱり無くなっていた。

「どうにでもしてくれ」

男は思わず道ばたに座り込んだ。

「じゃあまず、名前を聞かせて」

少女は澄んだ瞳をくるっと廻して言った。

鳴動6

「だからどうということなんだね。死体から内臓が消えているとは」
既に彼の額には煩悶の皺と加齢による皺の区別が付かなくなっていた。

「早く、報告したまえ」

彼は政敵を倒すことに人生の大半を費やしてきた。そのため、彼は多くの政治家と全く同じように非常事態に強くはなかった。

この部屋には内閣総理大臣、法務大臣、警視總監、内閣情報室長がいる。言わば今回のテロ事件最高対策本部の最高決定機関と言ってもよい。しかし、彼ら全てが実務には不得手な上、テロリストの影に脅えていた。

まだ、終わリじゃない。次に死ぬなんてごめんだ。

全員の顔に綺麗な楷書でそんな風に書かれているように見えた。矢面に立たされている内情、最高責任者の大黒は薄くなった額に珠のような汗を浮かべていた。

「もうすぐ、三浦がやってきます。現在捜査の指揮を取っているのは彼です。彼の口から状況を話してもらいましょう」

他の3人はイライラと苦虫を噛み潰したような顔をしている。こいつらは結局自分の命のことしか考えちゃいない。所詮は小心者の集まりだ。その証拠に、殺された官房長官のポストはなり手がなく空いたままだ。政治生命と自分の命の延命。金に汚れた手は、金以外のことには何の役にも立たない。

「いやいや、遅れちゃった。官邸なんて初めて来たんで迷っちゃった」三浦が緊張感のまるでない声で無遠慮に入って来た。

「いやいや暇人の方々がお集まりですな。いや、失敬」

彼の後ろには柵橋と内村和美が控えていた。

「彼等は誰なんだね」

法務大臣は自分の存在を印象づけるためのみ、重々しい声を出し

だが、簡単に三浦に遮られた。

「そんなどうでもいい話はよろしい。俺たちには時間がないからな」
総理大臣は口を開こうとしたが、忌々しそうに腕を組んで、三浦に先を促した。

「とにかく官房長官は死んだ。外傷はなし。内臓がそっくりなくなっていた。しかも、白昼突然苦しむ間もなく、死んだ。」

総理はゴクリと唾を呑んだ。異様な緊張感が会議室を包んだ。

「こんなことは誰にも出来ない。しかし、自然現象でもない。体から内臓が消えちまうなんて、奇病あるか？」

「ありません」

和美が口を挟んだ。

「すべての学会、あらゆる症例を精査しましたが、該当する症例はありません」

「それ以上に、テロだとする証拠があった」

三浦は起こり得る反応を予測して、楽しみながら言っている感じがした。だからこいつは、質が悪い。棚橋はそう思った。

「つまり、この事件は特殊な能力を持った何者かによる犯行であると断定せざるを得ない」

「そこが分かん。なぜそこで、断定できるのかね？」

「内臓の代わりに残されていたものがあつたんだ」

棚橋は固くビニール袋に覆われた一枚の紙切れを出して、それを机の上に置いた。

そこには稚拙な文字が踊っていた。

『10億円用意しろ。さもないと、世界の首脳がこっぴどみじんだよ』

集結 1

少女は北川真央と名乗った。

「ぼ、僕かい？僕は九条孝」

話し合いの場所は公園に移されていた。人気のない公園には、寂しそくに遊具が点在している。

孝はこの真央と名乗った美しい少女に警戒の気持ちを抱いていた。なぜ自分の能力がばれていたのか。孝ですら、自分の能力の発現に驚かされたのは最近のことだ。最初は自分の妹に見せた。妹は、孝の見せた映像に悲鳴を上げ、恐怖した。何てことはない。ちょっと怖い映画の1シーンを現実に見せたただけだ。しかし、効果靦面、孝は自分の能力を確信した。

「なぜ、僕的能力を知ってる？」

孝は一番気になることを率直に言った。

「あなた受験生よね。ちゃんと勉強してるの？」

真央は澄んだ瞳を孝に向けた。端正で美しい横顔は孝をドギマギさせるに充分だった。

「まあ、したりしなかったり。する時もあれば、しない時もあるみたい」

「ふーん。受かる気ないんだ」

「いや、そんなことはない。二浪はしたくない」

「無理ね」

真央は単刀直入に失礼なことを言った。孝は幾分鼻白む思いで言い返した。

「やってみないうちから、言い切らなくても・・・」

しかし、声は小さくなった。この子は中学生くらいかな、随分ませた感じだが、飛び抜けて美しい。きつと、もてるんだろうな。俺なんか鼻であしらわれてる。孝はそう思った。そして、自分が完全に彼女にペースを握られていることに気付いた。

「もう一度聞くけど、なんで、俺の能力を知ってるんだい？」

「私ね。未来が見えるの」

孝は驚いた。そして、失望した。

「ん？ああそうね。大学のことは未来が見えるから、言うんじゃないの。今に、それどこじゃなくなる事件が起こるの」

真央はもったいぶったような仕草で、孝に向き直ると言った。

「あなたは日本がそうなる前に救うの。だから、勉強どこじゃなくなるわ」

「え！？」

更に仰天している孝に真央は言った。

「まあ、私を信じればいいの。もう、女子中学生を脅かして、憂さ晴らしをしちゃ駄目」

孝は肩をすくめて、面目なさそうに笑った。

集結 2

うらぶれた劇場があり、そこにはうらぶれた芸人がふきだまっている。潰れそうな劇場に集まっている芸人たちは一様に面白くない。しかし、なぜか経営的に成り立っているから、不思議だ。そして、今日も少ないながら客が入っている。

その一番後列の席に北川真央が腰を下ろして、退屈そうにしていた。彼女は出てくる芸人を確認しては眠そうに、目を瞑った。その姿は、どこか瞑想しているヴィーナスを思わせた。

殆どの芸人は真央の注意を引くことはなかつし、取り立てて笑う訳でも無かつたので、一体この美しい大人びた中学生が、なぜ場末の劇場にいるのか、周りからは浮き上がって見えた。もつとも、ガラガラの客席に浮くも、浮かないもないのだから。

いつの間にか、幕間になると、一人の男性が真央の隣の席に腰を下ろした。彼は馴れ馴れしく彼女の方を向きながら、安っぽい態度で話しかけた。

「ねえ、君さあ、何でこんなとこにいるの？」

男はワザと自分の顔が見えるように、ポーズを取った。彼は最近、テレビに出始めた、イケメンの新進マジシャンだった。舞台袖から会場を覗き、可愛い子を見つけるとナンパをしては、遊びに連れ出していた。

「次に出てくるのは、俺の師匠なんだけど、とんでもない老いぼれでさ」

真央は冷然と男を無視した。

「そんなの見たってつままないって、俺が保証するよ」

「でも、あなたの先生何でしょう」

真央が反応すると、イケメンマジシャンは脈ありと踏んで、さらに馴れ馴れしく、切り込んできた。

「先生っていつでも、もう2年前に抜いたからなあ」

「それでは、鳳楽斉師匠、張り切ってお願いします。どうぞ」

投げ遣りな司会者が呼び込むと、年老いたマジシャンが登場した。彼は真央が考えていたより、遥かに高齢のように見えた。よろよろした足取りで出てきた鳳楽斉は、覚束ない手つきで花を出すと、観客席に放り投げた。しかし、観客席にいた数人の客は水を打ったように、静まったままだった。

「ね、あの手つき、指も震えてりゃ、マジシャンとしては致命的だ」「そうかしら」

「そうさ、だからこんなもの最後まで、見てないで、どこか遊びに行こう」

舞台には大きな壁が運び込まれていた。

「あなたはあれが出来るの？」

壁の周りにはカーテンで隠され、鳳楽斉はカーテンの上に手を出している。そして、次の瞬間、何のためらいもなく、歩いて壁を通り抜けた。

カーテンが落ちた時、鳳楽斉は大して面白くないような顔をして、見得をきった。

「はつきり言うけど五流のマジシャンには用がないの。あなたにはあの壁抜けは絶対出来ない」

真央は立ち上がって、男を見下ろして、侮蔑した口調で言った。

「あなたはお呼びじゃないのよ。私が必要としてる」

真央は舞台上の鳳楽斉を指差して、言った。

「彼が日本を救うのよ」

集結 3

北川洋子は自分の思索に揺れていた。殺された両親、そして、生き別れた妹。今の洋子には考えることで、手一杯だった。

精彩を欠いた生放送と、気の乗らない打ち合わせを終え、帰路に着く頃には洋子の体は性も根も尽き果てていた。

今日こそは両親に問い質さなくては、という思いは固まったまま、日々はただ、いたずらに過ぎ去って行った。

しかし、もう私も限界だ。平田との接見以来、警察からも内容の公開を求められ、そして、それを拒否している。いや、拒否したい訳ではない。報告すべき事実が見当たらないだけだ。自分に生き別れた妹がいる。そんなことが、警察の望んでいる情報なのだろうか。そうした、便宜上における警察との対立において、洋子の局内での立場も微妙なものになりつつあった。番組のスポンサーから、既に番組を卒業させては、という声もちらほら上がっている聞いた。しかし、この生い立ちの問題を解決しないことには、心の鬱屈は消えはしない。

今日こそ、白黒はつきりさせなくては、と重い体を引き摺って、タクシーに乗り込む。洋子は行き先を運転手に告げながら、シートに体を預けた。

私の両親は・・・

洋子の父はある研究所の主任であったということを知ったことがあったが、それがどのようなものであったのか、詳しく聞いたことはなかった。物心付いた頃には、囑託という存在で家でのんびりしていることが多くなっていった父。そして、溺愛という言葉は父と母のために作られたのではないかというほど、洋子を愛してくれている。最近も憂鬱げな洋子に何かれとなく、気を使ってくれている。

私の本当の両親・・・

そんなこと一度も考えたことはない。一点の疑念もありはしない。勿論両親が自分の実の親ではなかったなどという話は世間にもあることなのだろう。しかし、その両親が殺されていた話など世間に、そう転がっているはずがない。

洋子は足を引き摺りながら、タクシーを下りると、その時、心は決まっていた。

両親に問い質すのは明日にしよう。私は今疲れ過ぎている。こんな時に正常な判断など下せない。

もう何回、自分に嘘を言い聞かせたのだろうか。欺瞞だと分かっている。先延ばしにしたところで、心に染みのように広がる黒い疑念は、日一日と大きくなって行くだけなのだが。

洋子は門扉を開けて家に入ろうとした。するとその時、家の扉が小さく開いていることに気が付いた。洋子は携帯を取り出し、時間を確認した。もう、二時を過ぎている。不用心だ。何かあったのだろうか。嫌な不安は急速に込み上げてくる。慎重に一步一步玄関に入って行くと、ムツとするような生臭さが鼻をついた。何が起きているのか、脳裏に浮かべることすら出来ない。しかし、脳の奥底から急を告げる危険信号が大音量で鳴り始めている。入ってはいけない。一刻も早く、逃げ出さなくてはいけない。その心の声を聞きながらも、洋子は硬直した体を前へ前へと進めた。恐らくは、絶望へと。

両親の死体を死体だと認識することは、とても難しかった。それが人を成すどの部位なのか、外科医でも指摘することは困難だろう。一体いくつに千切られているのだろうか。しかし、洋子にはそれが両親の残骸であることは、床一面に広がった血の量で簡単に推測、いや断定出来た。

絶叫が洋子の口の端を引き裂いた。洋子は薄れゆく意識の中で、自分の喉から、これほどの声が出てくるとは想像も出来なかった。その瞬間、何かが脳の中ではじけ、新しい何かが、洋子を思考の奥底に押し込めた。

そして、陰惨な空気とはかけ離れた声が唐突に聞こえた。

「やっと現れたな」

洋子であったものの、は俊敏にその声の方向へ飛びかかった。

しかし、男、少年と言ってもいい年代だろう、彼は、いとも簡単に彼女の攻撃をかわした。猛獣のように獰猛な唸り声を上げる洋子に、人気ニュースキヤスターの面影はなかった。

「覚醒したな。洋子」

男は愛おしい目で、洋子を眺めた。洋子は男を睨み付けた。しかし、彼女の瞳には、知性の一欠片も残っていないかった。

集結 3 - 2

「無残だ」

急報に駆けつけてきたニュースキャスターの私邸は、肉屋の作業場のような惨状だった。

棚橋はついこの間見た無惨な死体のことを思い出した。犯人の身代わりに犯行声明に指紋を残し、三浦と棚橋が辿り着いた時には内蔵が分離していたあの死体だ。少なくとも、あの死体の足元にあったバケツの中には死骸を人間と判別出来るだけのものが残っていたのだが・・・

「狼か熊か、巨大生物の仕業か」

へらへらと薄ら笑いを浮かべた、三浦の後ろに渋い顔をした男性と女性が控えていた。

「さあ、次木先生お願いします」

棚橋は次木が明らかに迷惑そうに、そして、当惑した表情で言う表情を一瞥した。

「この状況で何か出来るとでも思うのか？」

彼の隣にいた横田藍も、反抗的な視線を惨状と三浦に向けていた。棚橋は藍が胃の中の物をぶちまけないかと、心配だったが、彼女は意外と気丈に振る舞っていた。か弱そうに見えて、度胸が座っている。棚橋は感心した。和美はまだ、洗面所で戻していることだろう。見た目は気が強そうでも、血や死体にはそして、無数に散らばった肉片は次木を待って、そのままの状態で放置されていた。血の臭いが鋭く鼻を突く。

「こんなバラバラになったものを再生できる訳ないでしょう」

藍は三浦を睨みつけたまま、一歩近付いた。三浦は慌てて飛び退くと、さらにへらへら笑いながら言った。

「おっと、怪力のお嬢さん。暴力は無しで行きましょうや」

棚橋は横田藍とは初対面だったが、彼女に怪力があるとは到底信

じられなかった。それぐらいに、彼女は華奢で小柄だ。それこそ、人は見かけに寄らないということか。藍は真っ赤になって、三浦に食ってかかるうとしたが、次木に窘められた。

「藍君、落ち着きなさい。三浦君には何を言っても無駄だろうからな」

三浦は藍を見ながら、胸を撫で下ろす仕草をした。

「まあいい、やるだけやってみよう」

次木は膝を曲げると血だまりの中に腰を下ろした。

「ズボンは弁償してくれるだろうな」

「ああ、あんたが一生履けないような凄いやつをプレゼントしよう」
三浦は笑いながら一步下がった。藍に対する警戒心は解いてないようだ。

そこに、和美がげっそりした顔で入って来た。が、場の雰囲気を観察したのか、扉の横に青い顔をして立っていた。

次木は手に力を入れて、肉片に翳した。10秒、20秒、30秒。じりじりと時間は過ぎたが何も起こらなかった。

「いや、もういい、十分だ。ありがとう」

「先生！」

次木は汗だくの顔を向けながら、昏倒した。駆け寄る藍よりも早く、血の海の中に倒れ込んだ。

「こりゃ、ズボンだけじゃすまなくなったな」

藍はきつと三浦を睨みつけたが、何も言わなかった。

「そっちのソファァで休ませてやれ」

和美が青い顔のまま、手伝おうと、近寄って来たが、藍はそれを無言で制すると、軽々と次木の体を抱えてソファァへと運んだ。棚橋と和美は呆氣にとられて藍を見つめた。

「これでいい。何もないよりはましだ」

三浦は無造作に肉片を掴んだ。

「次木のおっさんは、すげえなあ、棚橋。死んでいた細胞が生き返った」

棚橋は三浦の能力を思い出した。彼が持つ力は生きている細胞から記憶を引きずり出す能力だ。そいつのおかげで、とぼっちりを喰った棚橋は自分のキャリアを棒に振る羽目に陥ったのだ。しかし、三浦の能力は圧倒的に捜査には役に立つ。彼が出世している一つの要因ではあるのだ。

「まずいな」

「何か分かったのか？」

棚橋は三浦が何を知ったのか、聞いてみた。その肉片が何を物語るというのだろうか。

「何がまずい？」

「いや」

三浦は真剣な表情になった。

「ニユースキヤスターは死んじやいない」

「彼女は失踪したのでしょうか？」

和美は青い顔をして、三浦に言った。三浦はうなだれたように首を振った。

「それでは、彼女は誘拐されたのですか？」

「いや、違う。彼女は覚醒しちゃった」

三浦は憤怒の形相になった。

「こいつはヤバイ。最悪の状況だ。犯人は俺たちを完全に出し抜いて、ジョーカーを手に入れたようだ」

棚橋は目まぐるしく表情を変える三浦を珍しいものでも見るように眺めていた。しかし、彼の思考の大半を占めていたものは、

「俺は横田藍とどこかで会っている」

という事件とは全く関係のない、不確かな記憶のことにあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9752h/>

アンチ・ヒーローズ

2010年10月14日20時31分発行